
月影華

六条せり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月影華

【Zコード】

Z6458A

【作者名】

六条せり

【あらすじ】

暗殺集団「黒虎」で育てられた娘、史蓮。人を斬ることを生業としてきた彼女は、任務のさなか深手を負ってしまう。そこを小さな村の幽玄という青年に助けられ…。

深い闇が街を支配し、青白い月を雲が覆う。

史蓮は息を殺し、機を伺っていた。

まさか天井裏に彼女が潜んでいるなど、この男は気付いていないだろつ。

黒衣を纏い、帯にさしているのは刃に毒を塗った匕首（ひしゅ、鍔のない短刀）。

漆黒の長い髪は邪魔にならないように一つに束ね、史蓮は冷静な冷たい目で目標である男の様子をうかがう。

大柄な男は、重そうな腹を抱えてふんぞり返つて、一人の楽女の奏でるゆつたりとした胡弓の音色に耳傾けている。

調べによると、おそらくこの楽女は男の寵姫である華宝芳かほうしようという楽女だろう。

街の酒楼で楽女として雇われていた華宝芳の胡弓の腕をいたく気に入り、家妓として買い取つた男は毎晩彼女を召し、休む前に必ず一曲奏でさせる。

夜の闇に流れる、どこか悲しげにも感じる音色。

やがて、曲が終わると男が華宝芳になにやら声をかけ、それにつづく扉の閉じる音。

気配をうかがつと、びつやら男は華宝芳をさがらせたようだ。

機は、今だ！

史蓮は腰に差した匕首に手をかけると、室に飛び降りた。

「なにつ！」

突然天井より飛び降りてきた黒衣の娘に、男は口を瞠つて飛びのく。見かけによらず、その身のこなしさは速かつた。

「金鵬きんぱう、覚悟！」

鞘をはらい、史蓮はそのまま踏み込むと確実に任務を遂行する為に金鵬の口を左手でふわざき、右手に持つた匕首を太い首に押し当てる。

「ま、まて！」

必死に金鵬が史蓮に訴えようと、口を塞ぐ彼女の手の隙間から声を発するが、史蓮はそのまま、何の躊躇いもなく刃で金鵬の喉を搔き切つた。

一瞬の金鵬の見開いた目。

血が彼女の漆黒の衣装と顔にかかるが、かまわずに袖で顔の血を拭つた史蓮の耳に「ひつ」という、女の息を飲む声が聞こえた。

振り返れば、華宝芳が真っ青な顔で立っていた。

「だ…誰か！金鵬様がつつ！」

止めようとするより早く、華宝芳が悲鳴にも似た声で叫ぶ。しまつた！！

すぐに衛士たちが駆けつけてくるだらつ。

「早く、早く来てえ！！！」

「くつ！」

史蓮は華宝芳を突き飛ばすと、回廊へである。

「いたぞ、賊だ！」

「捕らえろ！」

すでに衛士たちが槍や剣を抜いて、史蓮田指し向かつてくる。捕まるわけには行かない！

突破口を見出さんと、回廊に田を走らせるも衛士たちは反対の回廊からも挟み撃ちにしようと、走ってきている。さすがに、この数の敵と戦うのは無理だ。

唇をかみ締めて、史蓮は回廊の手すりに手をかけて下を覗き込む。楼の三階。

下は池になつている。

……」のまま、捕らえられるくらいなら…つー

次の瞬間、彼女の右肩に熱が走った。

「くつ！」

「やつたぞ！」

衛士の槍が肩を斬りつけ、温かい血が腕を伝つてくるのがわかる。

さらにもう一撃、斬りつけようとするのを咄嗟にかわした史蓮は、手すりに足をかけるとそのまま宙に身を躍らせる。

少しの間をおいて、響く水音。

「飛び降りただと！」

「さがせ！ 絶対に逃がすな！！」

衛士たちはざわめき、すぐさま池に向かつべく階下へ走りだした。

史蓮は池の中から這い出ると、激痛に右肩を押される。思つたよりも深いのかもしれない。

きゅっと唇をかみしめ、屋敷の庭をぬける。

今、衛士たちに追いつかれたら明らかに不利だ。

史蓮は右腕をかばいながら塀を越える。

利き腕である右を痛めたのが失敗だった。

塀を飛び降りて暗闇を走り、屋敷から離れる。濡れた着物が足元に纏わりつくのもかまわず、ただ、ひたすら走つた。

月が雲に覆われて、闇一面に染まつた道を駆け抜ける。

肩も足も、ひどく痛い。

どれくらい、走つただろうか。

史蓮はがっくりと膝をついた。

もう、街からは随分と離れたはず。

これ以上は走れなかつた。三階から飛び降りた際に、足も痛めたのかもしけれない。

ひどく、右足が痛い。

「…っ！」

右の肩の激痛。

史蓮は肩を押されたまま、崩れるように草の上に倒れこんだ。

薄暗い部屋の中、史蓮は黒衣の男たちと共に、1人の老人を取り囲

んでいた。

「史蓮、お前の初仕事だ。やってみる」

「全洪様…」

ためらうように、まだ十歳の史蓮は頭目を見上げていた。

「殺すんだ、史蓮。」

匕首を握らせ、史蓮の背中を押して促す。

「お前も我ら黒虎の一員ならできるはずだ。」

目の前には、深手を負った黒衣の老人が彼女に何かを訴えようと、震える手を差し伸べる。

「殺せ…」

冷たく、拒否を許さぬ威圧感を持つて命じる全洪。

「…つ、つうつ…つ」

しゃくりをあげて史蓮は泣きながら老人の前に押しやられる。できない…。殺したくない！

「…蓮…」

かすかに聞こえた老人の声。

「殺れ、史蓮」

全洪の言葉は、絶対だった。

あふれる涙を止めることができないまま、史蓮は硬く目をつぶつて、教えられたとおり匕首で老人の首を斬りつけた。

…明らかに人の命を奪う厭な感触と、顔にかかる熱い血。

忘れないと思つても、一生忘ることはできないだろう。

「よくやつた、史蓮。…裏切り者の始末はこれで完了した。いくぞ」

全洪は史蓮の肩を叩く。

「ごめんなさい、ごめんなさい…」「めんなさい。

涙が止まらなかつた。

黒虎という暗殺集団にまだ物心のつく前に拾われて育てられた史蓮の、まるで祖父のように彼女に接してくれた人物を頭目の全洪は彼女に殺させたのだ。

そして、それが、史蓮の初めての任務であった。

「……………」

II (前書き)

任務を果たすが、その際に深手を負つた史蓮。追つ手から逃れるも、そのまま意識を失い……。

はつと氣がついた史蓮は、自分がどこにいるのか咄嗟にはわからなかつた。

彼女は寝台の上で、薄手の布団がかけられていた。

確か、外で倒れたはず……。

体を起こすと右肩に痛みが走るが、手当てが施されてることに気が付いた。

着物も黒衣ではなく、さっぱりとした男物の衣を着せられていた。

…ここは、どこ？

史蓮はあたりを伺う。

どこかの庵だろうか、そんなに大きくはないが質素で落ち着いた雰囲気の室である。

また、薬草だらうか。名も知らぬ草や、乾燥させたもの、薬草の調合に使う道具などが置かれている。

そして、近くの卓の上には彼女の纏っていた黒衣と匕首が置かれていた。

「気がついたみたいですね」

不意にかけられた声に、身構えるように史蓮はそちらへ顔を向ける。

「ほらほら、まだ傷は完全に塞がっているわけではないのですよ」

苦笑交じりに言つるのは、年の頃なら三十かそれよりも少し若いと思われる男で温厚な笑みを浮かべている。

その穏やかな表情と柔らかな口調や聲音、雰囲気からは害意はまったく感じられない。

むしろ、安堵を感じる。

「あなたは傷を負つて倒れていたのですよ。…この村のはずれで」

そういうながら、青年は史蓮の傍にやつてくると、手にした薬湯の入った器を差し出す。

「これは鎮痛作用があります。飲んでください」

「…ありがとうございます」

器を受け取った史蓮は、小さく礼を述べた。

史蓮の束ねていた長い髪はほどいてあり、寝台に流れている。

「失礼かと思ったのですが…傷の治療の為あなたの着物も着替えさせてもらいました。」

申し訳なさげに青年はいい、卓を示す。

「あなたの着物はここに」

「…うん」

薬草の香りが強い薬湯に口をつけながら史蓮は頷いた。
返事こそ言葉少なかつたが、史蓮は警戒を解いていた。

警戒のしようがないのだ。

「幽玄先生」

戸口で声がして、ふくよかなおばさんが着物を手に入ってきた。

「ああ、劉さんですか？」

青年・幽玄は微笑む。

「先生、わたしが娘の頃に着ていた服だけど、これでいいかい？」
劉といつおばさんは、手にしている柔らかな色合いの文物の衣を広げてみせる。

「ええ、助かります」

幽玄はおばさんに笑みながら頷いた。

「ああ、この子かい？」

寝台で上体を起こしている史蓮に気付いたおばさんが、衣を手にやつてくる。

そしてじぱりと史蓮を見つめて、にっこり笑う。

「うん、この子にならこの色でよかつたわね。この衣はもつ着ないから好きに着てくれれ」

おばさんの勢いに史蓮はあっけにとられながらも、ペシッと頭を下げる。

「あなたも、災難だつたねえ。刀か何かで斬りつけられたんだろ？
盗賊か何かに襲われたのかい？」

心配そうな表情になつておばさんは史蓮の顔を覗き込む。

「あ…いえ…」

「でも、幽玄先生に助けられてよかつたよ。先生は」「ひりで一番の名医だからね」

「劉さん、」

困つたように苦笑する幽玄。

「まだ彼女は先ほじ田がためたばかりなので、すこしうつへつせせて上げましょう」

「あ、そうだったねえ。まあ、無理しないで養生するんだよ。なにか困つたことがあつたら遠慮なくいつておくれ、ちからになるよ」「おばさんはいつも眞つと優しく史蓮の肩をとんとんと叩き、幽玄に向き直る。

「じゃあ先生、この子の」とお願ひしますよ

「ええ」

温和な笑みで頷き、史蓮に言ひ。

「若い娘さんに男物の着物を着せておくのも何ですので、着物を用意していただいたんですよ。お世話好きなかたなので」

賑やかな方だつたでしょ? と笑つて。

「私がいては着替えができませんね。隣の部屋で薬草を煎じていますので、何かあつたら呼んでくださいね」

幽玄はそういうと静かに室を出て行く。

それを見届けると、劉おばさんが持つてきた着物に田を落とし着替え始めた。

右肩の傷には包帯が巻かれていたが、痛みがだいぶ減つた気がする。だが…。

史蓮は着物に袖を通し、前を合わせて細帯を結びながら卓の上の黒衣とヒ首に田を向ける。

黒衣を纏つてヒ首を帶びた娘の姿に、幽玄は何の疑問も抱かなかつたのだろうか…。

幽玄の態度に、彼女を恐れる素振りも、危ういものに触れる様な素

振りもない。

あるのは、心が安らぐような、安堵と穏やかさ。衣を纏い、長い髪をゆるべ一つに束ねる。

こういった着物を着るのは初めてだ。

任務の時は黒衣、それ以外のときでも男装していた彼女にとつて、このような着物を着るのは嬉しさと恥ずかしさと、緊張が伴つものだった。

「娘さん、入つてもいいですか？」

扉の外から幽玄が呼びかける。

「忘れ物をしてしまいました」

史蓮はその言葉に、扉を開ける。

幽玄は史蓮の姿に、びっくりしたようだ。

「…みちがえましたよ。」

娘らしい姿の史蓮に、僅かに目を瞠るとつりと笑みを向ける。そんな幽玄に、史蓮は戸惑ったような、それと同時に照れくさいとの嬉しさが入り混じった表情になる。

「…ありがとづ」

史蓮の言葉に幽玄は笑みを返し、籠に乾燥させた薬草を三種類と薬草をすりつぶす道具を手にとると隣の部屋へ向かう。その時だ。

「先生のお嫁さん？」

庭に面した窓から子供の声がする。

「先生、お嫁さんもらつたの？」

見れば子供たちが興味津々と言つた顔で史蓮と幽玄を見つめている。

「ちがいますよ、この娘さんは怪我をして倒れていらっしゃったんですよ」

子供たちがわいわい騒ぐのに苦笑しつつ、説明する幽玄に思わず史蓮は微笑んでいた。

自然に笑みが出るなんて何年ぶりだろ？

「えっと、娘さん…名前を教えてもらえますか？」

子供たちの対応をしながら、幽玄が問つ。

「…史蓮、です」

「史蓮さん、傷が癒えるまで好きなだけ」「…留まつていてかまいませんから」

茶化す子供たちに困ったような笑みを浮かべて振り返る。

「はい」

その姿に、くす、と小さく笑って史蓮は頷いた。

II (前書き)

史蓮は幽玄先生と村の人たちに呼ばれている青年に助けられる。そして、その村で傷を癒すこと。

幽玄の庵での時間は、今までの史蓮の暮らしとはまったく違つものだった。

穏やかで緩やかな時間で、心が安らぐのを感じていた。
この村や、庵では、人々は支えあって、みなでお互いを思いやりながら過ごしている。

人を殺めることも、誰かに命を狙われることも、逃げることも、襲うこともしなくていい。

もしも、この村に生まれてきてくれたのなら、もつと違つた自分になつていただろう。

史蓮は、微かに胸が痛んだ。

ないものねだりなのはわかっている。

時間を戻せないのもわかっている。

自分が、この暮らしにそぐわないのもわかっている。
それに。

史蓮は幽玄が一切素性を聞かずに、黒衣や匕首を見ても怪しむそぶりすら見せず、穏やかな物腰で接してくるのに戸惑いを感じていた。こんなに、人に優しくされたのは、彼女を育ててくれた…そして自らの手で殺めなくてはならなかつた史寿以来だった。

幽玄の優しさが、気遣いが、史蓮にはそのあとに待つ、つらさを思つて起こされる。

劉おばさんが持つてきた夕食を済ませたあと、史蓮は薬草を調合している幽玄をぼんやりと見つめていた。

「…幽玄先生」

「何ですか？ 史蓮さん」

「うん……わたしの素性…聞かないの？」

史蓮は微かに胸が痛むのを感じながら切り出す。

聞かれることは黙つておいてもいいのではないか。

そう思つ反面、これ以上自分を隠しておくのはつらい氣もする。

「…そうですねえ…」

彼女の言葉に、乾燥させた薬草を煎じ薬を作るために鍋に入れながら幽玄は顔を向ける。

「…まあ、言いたくないことは誰にでも一つや二つあるものです。」
「…ひりと笑う。

「…うん」

そう、答えたが、いつそのこと聞いてくれたほうがよかつた。
暗殺団の一員で、何人もの人間を殺してきた。

それは、決して消えることのない事実。

史蓮は膝を抱え、燭の明かりの中、別の薬草のすりつぶす作業をはじめた幽玄を見つめる。

自分が助けた人物が暗殺者と知つたら、後悔するかも知れない。
いや、そればかりか…。

あの穏やかな幽玄の表情が冷たく自分に向けられるのが恐ろしい。
何も言わないで、明日早々に立ち去つたほうがいいかも知れない。
史蓮は膝に顔をうずめる。

「…でも、どうしてだらう…。」

「…何だか、つらい。」

「…史蓮さん、」

幽玄からの呼びかけ。

「…はい」

「…私は別に素性は気になませんよ。…たとえ、あなたが人を殺
めることを生業としていても、ですね。」

その言葉に、史蓮ははっと顔をあげる。

幽玄のまっすぐな眼差しと史蓮の視線がかち合つ。

自分の表情が強張るのがわかる。

「…幽玄…せんせ…い…」

「…例えば、ですよ」

そういう幽玄の表情は、いつもの柔軟なもので。

「……。」

「でもですね。」

静かな幽玄の声。

「私はあなたを助けたいと思ったから、助けたのですよ」

幽玄は立ち上がり、煎じていた薬湯を器に移して史蓮に手渡す。

「もう遅いですから、これを飲んで休んでください。痛み止めですかから」

「うん……」

幽玄の言葉に頷いて、史蓮は薬湯を受け取る。

「明日は早いですよ、ゆっくり休んでくださいね」

微笑む幽玄。

彼の微笑みだけは、失いたくなかった。

「ぐん、と頷いた史蓮は薬湯に口をつけた。

四（前書き）

小さな村での生活は、今まで史蓮が生きてきた世界とはまったく違
い、優しく穏やかに過ぎていった。

史蓮は、自分の素性を思つと、幽々と一緒にいることが許されない
気がしていた。

翌朝、傷の痛みはほとんどなく、頭もすっきりとしていた。こんなにすっきりと目覚められたのも、薬湯に安眠作用のある薬草も調合してあつたのかもしない。

「起きましたね」

彼女が起きたことに気付いた幽玄が、薬草の入った籠を手にやつてくる。

「気分はどうですか？ 痛みは？」

「平氣です、久しぶりにすっきりと起きました。」

「それはよかつた、…食事にしましょうか？」

いたわるような、やんわりとした笑みを向けて、史蓮を起こすのを手を差し伸べて手伝う幽玄。

心が和む。

昨日の夜のこと、幽玄は本当に氣にしていなかった。それが、ありがたかった。

「ねえ、幽玄先生」

寝台より降りた史蓮は、幽玄を見上げる。

「お礼に、今日は先生のお手伝いさせてください」

今日一日、恩返しをしてこつそりこきでよう。

そのことを考へると、胸がきゅっと掘まれたよつて痛くなる。

「それはありがたいですね」

史蓮の申し出に、幽玄は嬉しそうに答えた。

小さな幽玄の庵には村人たちが毎日のように尋ねてくる。

病や怪我はもちろんのこと、相談や茶飲み話。

それだけで、幽玄がどれほどこの村の人々に慕われているのかがわかる。

「史蓮さん、その薬草をこの器に入れて置いてください。それと、

「この薬を英琳ちゃんの膝に塗つてあげてください」

「はい」

薬草を調合しながら、幽玄は史蓮に指示を出す。

「えっと、これですね？」

言われた薬草を器に移し、軟膏を手に膝を擦りむいて泣いている幼い少女の視線にあわせてしゃがみこむ。

「英琳ちゃん、大丈夫よ。すぐに痛いの治してあげるからね、泣かないで」

「史蓮さんは、子供にすぐになつかれそうですね」

あやしながら薬を塗る史蓮の姿に、くすくすと幽玄は笑う。

「幽玄先生、その笑いつて褒めているの？」

「褒めていますよ、…ただ、それは塗りすぎですね」

明らかに、傷の五倍はある面積に薬をつけて、なおも塗っている史蓮におかしそうに声を立てて笑う幽玄。

「…、そんなに笑わなくてもいいじゃない！」

そういう史蓮も吹きだしてしまっている。

…できることなら、ずっとこうしていたい。

このまま、この村で幽玄先生の手伝いがしたい。

…自分の本来の生業を思つと、胸が重くなる。

どんなに楽しくても、望みを持つても、心に引っかかる暗殺者という烙印。

わたしは、人を殺すこと仕事をしてきた人間なのだ。

…史蓮さん？」

心配そうに顔を覗き込まれて、史蓮ははつと我に返る。

「どうかされたのですか？」

「…ううん、なんでもない。」

ふつきるように、頭を振ると幽玄を見上げる

「先生、次は？」

田は、すっかりと落ちていた。

「史蓮さん、お疲れ様でしたね。」

「口一口しながら幽玄は史蓮の向かいに腰を下ろす。

「でも、あなたのおかげで、いつも以上に仕事をこなせましたし楽しく過りました。ありがとうございました。」

「わたしも、幽玄先生のお手伝い、楽しかつたです」

幽玄の為にお茶を煎れる史蓮に、幽玄は呟くように口にする。

「史蓮さんを変えよかつたら、ずっとここにいてほしこのですが……」

その言葉に、史蓮は小さく胸が痛む。

今夜、ここを去ろうといつに。

これ以上、わたしに優しくしないで。

そう思つ反面、許されるなり、その申し出を受けたい自分。

「…先生、お茶をどうぞ」

聞こえなかつた振りをして、湯飲みを幽玄の前に置く。

幽玄は特に何も言わなかつた。

ただ、何かを考えているようだつた。

史蓮はそのまま、奥へ行くと匕首と黒衣を手にする。

戸口に向かおうと、振り返つた史蓮の目の前に、幽玄が立つていた。

「…」

今のは気配さえも感じさせなかつた。

「史蓮さん、少しいいでしようか？」

「…なんですか？」

「…ここ、どどまひつといつ氣は…ありませんか？」

「…」

まつすぐな視線に耐え切れず、史蓮はうつむいて視線をそらす。

「…わたしには、…先生と一緒にいることが許されない…。」

言葉に詰まりながら、史蓮が呟く。

「どうことです？」

「…先生、お願い。やさしくしないで。…わたしは人に優しくされる価値はないの」

「史蓮さん…」

「わたしは…人を殺すことしかできない人間なのだから……っ
もう、とまらなかつた。

涙が込み上げてくる。

「わたしは、黒虎の暗殺者だから……っ
「黒虎……」

幽玄の声に驚きの色が感じられた。

黒虎といえば誰もが知る暗殺集団。

無理もない、と史蓮はきゅっと唇をかみ締める。

「わたしは、今までに多くの人を手にかけてきました。…わたしには、…先生のような人と一緒にいることなんてできない…」

「史蓮さん…」

突然、史蓮は幽玄に抱きしめられた。

「…かまいませんよ。あなたが黒虎の一員でも」

慈しむように史蓮の髪をなでる。

「先生…」

顔をあげた史蓮の目の前にあつたのは、限りない優しさに満ちた幽玄の眼差し。

「それに、あなたは自分の行つてきたことを悔いでいるのでしょうか?…何事も、やり直せない、といつことはないはずですよ。」

「…」

その言葉に、史蓮はじつと幽玄を見上げる。

「…私の友人の話ですが…」

そう、幽玄が切り出したときだつた。

「先生、史蓮ちゃん、いるかい?」

劉おばさんが夕食のおかずを持つてやってきたのだ。

「は、はい」

いきなりのことで、慌てて離れる一人。

おばさんは不思議そうに幽玄と史蓮を交互に見やつていたが、あらあら、と笑い出した。

「若い人の邪魔をしちゃつたわねえ、『めんなさいね』

何かを勘違いしたのか笑いながらおばさんと口に向かう。

「ちょ、ちょっと劉さん？！」

勘違いされてる、とあわてて後を追う幽玄。

「いいのよ、先生もどつどつお嫁を迎える気になつたのねえ…」

「だから、勘違いされてないですか？劉さん？！」

遠くなる、おばさんと幽玄の声。

史蓮はしばらく立ち尽くして、意を決したように顎と黒衣を抱えた。

そして、幽玄の庵を出て行った。

五（前書き）

幽玄に自分が暗殺者であることを打ち明けた史蓮。それでも、幽玄は優しく史蓮を受け止めようとする。自分を縛る暗殺者をいう枷を、史蓮は断ち切ることができるか…。

史蓮が向かったのは、醉虎酒家すいじゆかといつ酒場だった。

酔つ払いたちや顔なじみの酒場女たちに声をかけられるがまわずに、一階へ駆け上がる。

「全洪様！」

史蓮は頭目めいの名を叫ぶ。

この酒場の一階が黒虎の拠点になっているのだ。

「全洪様！」

「なんだ、史蓮」

一度めにして、ようやく全洪が隣の部屋から出でてくる。傍らには艶な微笑を浮かべた女がしなだれかかっている。

「どうしたんだ、史蓮」

「……。」

ぐつと拳を握つて、一呼吸置いて。

意を決したように顔をあげると、きつとした顔を向ける。

「わたしを、……黒虎から抜けさせてください！」

「……なんだと？」

全洪の表情が一変する。

「それが、今まで育ててくれた者に言つ言葉か！」

頬を殴られ、史蓮の体はそのまま壁際に倒れる。

「赤ん坊の頃に親に捨てられて、野垂れ死に寸前だったお前を助けたのは誰だと思っているんだ！」

容赦なく、全洪の蹴りが彼女の傷を負っていた右肩にも叩き込まれる。

「女の子にひどいことしちゃダメよお

甘つたるい声で女が全洪の腕に抱きつく。

「……史蓮、おまえ忘れてないだろうな……え？ 7年前のことさ。」

激痛に右肩を押さえてうめいていた、史蓮が目を瞪る。

「お前が、その手で初めて殺しをしたことを。…裏切り者は、始末しなきやなあ…」

全洪は女を脇に押しやりと腰の刀を抜き放った。

「お前が殺した、史寿のやつも黒虎を抜けるといいやがつた。だから、始末したつて言つのに…」

「おじいちゃん！」

史蓮の脳裏に、消えることのない、あの初めて人を殺した日の」とがよみがえる。

「あいつが面倒見てたお前までが同じことを言こ出すとはな…。史蓮、あの世で史寿にあわせてやるよ」
全洪はゆっくりと史蓮に歩み寄った。

幽玄は史蓮の姿がないことに呆然と立ち尽くした。

「史蓮さん…」

黒虎という暗殺集団。

そこの暗殺者の一人だといつていった。

「……。」

幽玄は立ち上がりと、寝台の下の葛籠くらわを引っ張り出すと、そこから一振りの刀を取り出した。

「…黒虎、といいましたね…」

呴いた幽玄の表情はいつもの温厚なものではなかつた。

彼は刀を腰に帯びると、そのいつもの彼からは想像もできない速さで庵を飛び出していった。

史蓮は、倒れたまま転がつて全洪の刃をかわす。

間髪おかず、頬を掠めて刃が床につきたてられた。

「ちよろちよろと…っ！」

刀を床から引き抜くまでの僅かな隙を突いて、史蓮は匕首をつかむ

と跳ね起きる。

鞘を払うと間合いを取つて構えたまま全洪の出方を伺う史蓮。

「お前の技量はたかが知れる。俺に勝てやしないさ」

刀を床から引き抜き、構える全洪。

たしかに、技術や力でなら勝てない。

でも、速さと動きなら…。

史蓮は全洪が動くのを待っていた。

全洪が斬りかかってきたら、その刃を受け流し、下段を狙おう。

張り詰めた空気。

「行くぞ！」

全洪が踏み込むと同時に斬りかかってきた。

「くつ！」

史蓮は匕首でその刃を受け、そのまま受け流す。

「甘い！」

。

が

「か……は……っ」

蹴りが、史蓮のわき腹に叩き込まれる。

「か……は……っ」

鈍い痛み、壁に背中をぶつけずると倒れこむ。

ここで、死にたくない！

わき腹に叩き込まれた重い一撃と、右肩の疼痛を必死にこらえ、史蓮は力を振り絞って立ち上がる。

「……はあっ！」

気合を込めて、速さを活かして一気に懷に入り込む。

「何！」

そのまま匕首で首を狙うが、痛めた利き腕は、僅かにその狙いを狂わせる。

浅く、全洪の胸をかすつただけだった。

「惜しかつたな、史蓮。」

全洪は、史蓮の束ねた長い髪をつかむ。

勝ち誇った表情で、史蓮をひき起こす

「くつ！」

全洪から離れねば！

史蓮は咄嗟に手にした匕首でざつと横しげもなく自分の髪を切った。

そしてそのまま、後ろに飛び退る。

全洪の手に残つたのは長い漆黒の髪。

「小娘が！」

史蓮の髪を投げ捨てるど、大きく刀を振りかぶつて斬りかかる。

「幽玄先生、ごめんなさい！」

死を覚悟し、目をつぶつた史蓮だつたが。

「史蓮さん！――」

声と同時に、甲高い金属音。

見れば、幽玄が史蓮の前に飛び出し、全洪の刃を刀で受け止めていた。

「幽玄先生！――」

「史蓮さん、無事……じゃないですね……」

「先生、逃げて！先生まで殺される！」

予想もしなかつた幽玄の姿に驚く間もなく必死に叫ぶ史蓮に、幽玄は微かに微笑む。

「殺されはしません。あなたを守りますから」

そう言つうと、全洪に向き直る。

「史蓮さんを黒虎から抜けさせなさい。」

「何を言つているんだ、おまえは。死にたくないなら引っ込んでろ！」

「……私を倒すと？」

幽玄は可笑しそうに全洪を見やる。

その笑みは微かに冷笑にも取れるものだ。

「……先生……？」

史蓮が、いつもと違う幽玄に釘付けになつている。

「……何を……っ」

言いかけた全洪の顔色が変わる。

明らかに、驚愕と恐れの色を見せている。

「お、おまえは……黄叙徳……！」

黄叙徳。その名は史蓮にも聞き覚えがあった。

十年前に行方をくらませた、高名な剣客。

剣技にかけては右に出るものはなく、仇討ち、果し合いなどで何十人もの剣客や無頼漢たちを斬つたといつ……。

「先生が……黄叙徳……」

温和で常に柔らかな言動の幽玄が、怜俐冷徹な剣客、黄叙徳……？

史蓮は信じられない、といった表情のまま幽玄を見上げている。

「もう一度言います。」

そういつた幽玄の表情は、冷たく鋭いもので。

「史蓮さんを黒虎から抜けさせなさい。」

「……ふざけるんじゃねえぞ……黄叙徳だろうと何だろうとかまわねえ！殺す！！！」

全洪が斬りかかる。

「はっ！」

幽玄はその太刀をかわすと、全洪の左肩から一気に斬りつける。

「ぐわああっ！」

それは、あまりにあつけなかつた。

仮にも黒虎を束ねる全洪は決して弱いわけではない。しかし、幽玄の強さは段違いだった。

「そのくらいの怪我では死にません」

床に転がつて絶叫する全洪に一警し、床にへたり込んだままの女に幽玄は顔を向ける。

「役人をお呼びなさい。黒虎はもう解散ですよ。」

「ひゃ……ひゃい！」

腰が抜けたのだろう、女は這うように階下に降りていった。

「……史蓮さん……」

床に座り込んでいる史蓮の前に膝をつき、少し悲しげに微笑む。

「…もう、剣は握るまい、と誓ったのですが…あなたを失う」とのほうが、もつと厭なので…」

「偉そうなことを言つても、私も所詮こうじつた人間なのですよ。」

「…先生…」

史蓮は首を横に振つて、幽玄の胸に倒れこんだ。

「史蓮さん、」

「先生…、先生は…、先生です。」

「…史蓮さん…。…それにしても、私の過去の記憶は間違つてなかつたですね、黒虎の根城はかつて耳に入つていたので…。」

今になつて役に立つとは、と苦笑する。

やがて、階下が騒がしくなつてきた。

「役人が來たみたいですね。史蓮さん、傷の手当でもしなければなりませんし…行きましょつか。」

「はい、」

史蓮は頷き、幽玄が抱き上げるに任せた。

「…髪が、短くなつてしまいましましたね…。」

そつと、痛ましそうに肩にかかる長さになつた史蓮の髪に触れる。

「…せつかく治りかけた傷も開いてしまつています。…帰つたら、治療するのでおとなしく休んでいてくださいね」

そういう幽玄は二つもの幽玄で。

「はい」

史蓮も見上げて、小さく頷いた。

「幽玄先生、史蓮おねえちゃん!」
子供たちが、わつと庭に入つてくる。
あれから、一月。

史蓮はあの日、庵へと帰る道々で幽玄の過去を聞いた。

幽玄の本当の名前は、黄叙徳。

かつて多くの人間を斬つた剣客。

だが、仇討ちの依頼をうけ、無関係な幼い子供たちさえも殺さなくてはならなくなり、もう剣を握るまいと誓つたことも。

史蓮は幽玄の元に、この村に留まることにした。

黒虎は解散し、彼女は自由になれたのだ。

…そして…。

「……史蓮さん、あのですね」

暖かい日差しとさわやかな風が吹く庭に椅子を持ち出して、子供たちにせがまれて本を読んで聞かせている幽玄は、傍らでお茶の仕度をする史蓮を見つめて呼びかける。

「なんですか？幽玄先生」

顔を向けた史蓮に、幽玄はゆっくり立ち上がる。

「…私の妻になつてください。」

「え…？」

思わず、幽玄を見つめる史蓮だったが、やがて微笑み小さく頷いた。

「はい」

史蓮の返事に、わあっと子供たちが歓声をあげる。

「幽玄先生、史蓮ちゃん、それからみんなも、飲茶にするよ」

そういうて、大きな蒸籠せいろを抱えてきたのは劉おばさんだ。

これからは、まっすぐにこの村で生きていく。

史蓮は幽玄を見上げる。

幽玄は相変わらず穏やかな表情で笑みを返す。

山間の小さな村の初夏のことであった。

五（後書き）

読んでくださいまして、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6458a/>

月影華

2010年10月9日07時29分発行